

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	栞田 恵
論文題目	幼児期における表情の理解と意図的な表出		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は5つの実証的研究によって、幼児期における表情の理解と意図的な表情表出について発達の観点から、検討したものである。論文は7章、5つの研究から構成されている。</p> <p>本論文は、表情の理解と表出について特に幼児期に着眼し、実験手法に基づいて解明した心理学研究である。</p> <p>第1章「表情の理解と意図的な表出」では、研究の主題である意図的な表出の定義を行った。続いて、これまでの研究が着眼してきた、本音を隠すように表情を偽装するタイプの表情にかかわる研究の限界を述べたうえで、偽装のかかわらない意図的な表出を検討する必要性を述べている。さらに、本研究の目的が、幼児期を対象に、意図的な表出がどのような要因に支えられて可能になり、向上するかについて調べるために、表情表出と表情や感情の理解の関連、そして、表情の構成要素の理解の発達の变化を明らかにすることとし、本論文の課題を明確化している。</p> <p>第2章「幼児期における感情の理解と表情および描画による感情の表出」では、研究1として、4歳児、5歳児を対象に、感情の理解と表情を現す能力がどのように関連するかを検討した。その結果、感情の理解を求める課題では、語彙力と正の相関が見られたのに対し、表情の表出課題では語彙力との相関は見られなかったことから、非言語的な表情表出は言語的な感情の理解とが独立していることを示した。</p> <p>第3章「4,5歳児における表情の理解と意図的な表出の関連」では、研究2として、研究1と同じく4歳児、5歳児を対象に、表情の理解課題と、表出を求める課題を実施した。その結果、4歳児では表情の理解を測る課題と表出課題の成績の相関関係がみとめられなかった一方で、5歳児では表情の理解と表出の成績に正の相関関係が見られ、表情の理解と表出の関連は発達の的に変化することが示された。</p> <p>第4章「3歳児における表情の理解と意図的な表出の関連：表情および感情の理解が意図的な表出の遂行に及ぼす影響」では、研究3として、3歳児を対象に、表情の理解課題と、表出ならびに模倣を求める課題を実施した。その結果、理解と表出に正の相関関係が見られた一方で、理解と模倣の間には相関がみとめられなかったことから、3歳児では感情語の理解の発達度合いが意図的な表情表出の遂行に影響しうる可能性が示唆された。以上、研究1から3を一貫して表情の表出は理解を求める課題成績に比べて低い傾向が見られた。その原因として、仮に感情を理解していたとしても、表情筋のコントロールが不十分で、自身の意図した表情となっていなかった可能性が残っていた。</p> <p>第5章「基本感情を表す表情の構成要素に関する理解の発達」では、研究4として、上記の可能性を検討するために、表情筋の制御を必要とせず、表情の特徴である構成要素について「福笑い」の要領で理解の程度を数量化する課題（以降、表情パズル課題と示す）を開発した。その上で、4歳児および5歳児を対象として表情パズル課題</p>			

を実施した結果、5歳児の課題成績が4歳児よりも高いこと、喜びと驚きについては目と口、悲しみと怒りについては目と眉の領域を理解していることなどが明らかとなった。

第6章「表情の構成要素に着目した感情理解の発達：幼児は他の幼児が作成した表情をどのように理解するか？」では、研究5として、研究4の参加者によって課題中に作成された表情を刺激とし4歳児、5歳児に提示した結果、悲しみと怒りについては、目・口がそれぞれの感情を表すパーツで作成された表情でも、眉の向きがその感情の特徴に不一致である場合には、悲しみと怒りの感情判断に混同が生じること等が明らかとなった。

第7章「総合考察」では、一連の実験による成果に基づいて表情の理解と表出の特性について議論している。特に本研究の成果として、1) 知見が一貫していなかった子どもの表情の理解と表出の関連について、年齢による変化という観点で新たな説明を可能としたこと、2) 意図的な表出のプロセスを、表出に関わる理解の要素とアウトプットする実行の要素に分割することにより、従来考えられてきたよりも早期の段階から表情の構成要素が理解されていることを示した点にあることを述べた。こうした議論を踏まえたうえで、今後の研究方向について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、幼児期における表情の理解と表出との関わりについて、心理学の手法を駆使した5つの実験を実施し、得られた結果を心理学のモデルに位置づけ、個人差の観点から検討したものである。

本論文の特色は以下の3点である。

1. 感情理解と表出とが相互に関連しつつ、表情の意図的な制御のあり方が、発達段階に応じて変化する様相を明らかにした点
2. 表出にいたるプロセスの個人差について、表情の理解と運動制御とを分離する課題を新たに考案し、多彩な指標とともに明らかにした点
3. 成人には通じないが、子供同士では通ずる。いわゆる同世代効果を、心理学の情報処理理論を援用し、幼稚園等のフィールドにおいて新たに示した点

第1章では、心理学における表情の認知研究を展望し、表出に関わる定義は多様であることを踏まえて、感情の機能と性質の観点から、感情を隠蔽した表情と、逆に感情を強調するタイプとに大別されることを示した。その上で幼児期における発達研究の動向を概観し、感情の理解と表出との関わりを包括的に解明する必要性を指摘した点に着眼の鋭さがある。

第2章では、4, 5歳児を対象に、感情の理解と表出がどのように関連するかを検討した。その結果、感情の理解は、語彙力と正に相関する一方で、表情との関連においては相関が見られないことから、言語的な感情理解は、非言語的な表情表出の過程と独立していることを示唆した。

続く第3章では、課題で求める理解の対象を語彙から他者の表情へと発展させ、4歳児の段階ではみられない表情の理解と表出との相関関係が5歳児において認められることを示した。

第4章では、3歳児を対象に、同様の実験課題を実施し、理解と表出との間にみとめられた正の相関関係、模倣との間にみとめられないことを見出し、3歳から5歳へと至る理解と表出の関わりダイナミクスを明らかにした点で高く評価できる。

第5章では、従来の課題の問題点として、顔面筋などの運動のコントロールが表出に交絡している可能性を指摘した上で、筋肉の制御を必要とせず表情の構成要素にかかわる理解を評価する「パズル課題」を開発した。この課題をでは表情のパーツを「福笑い」の要領で並べてゆくが、その課題成績が5歳児において4歳児よりも高いこと、さらに「喜び」と「驚き」の感情は目と口、「悲しみ」と「怒り」については目と眉が手がかりであることを、選択の個人間差の観点から明らかとした。

続く第6章では、パズル課題で作成された表情を刺激とし、これを同世代の4, 5歳児がどう読み取るのか検討した結果、「悲しみ」と「怒り」では眉が手がかりとなること、

対し「喜び」と「驚き」では口の形状も手がかかりとなることが示された。この結果は、同世代の幼児同士のコミュニケーションの在り方を多面的に考察する上での意義を持つ。

第7章「総合考察」では、本研究の学術的意義とおよび方法論的意義を述べ、表情の理解と表出に関わるモデルを提案し、残された課題と今後の研究方向を示した。

以上のように本論文は、幼児期における表情の理解と、その意図的な表出との関係性を明らかにすべく、論者は多くの研究成果と問題意識に基づいて、幼稚園・保育園等のフィールドの確保から行動実験の実施に至るまでを果敢にこなして、議論を構築した。

他方、今後に残された問題として以下の点が指摘された。

- (1) 他者の視点を参照軸とし、再帰的に理解が育まれるプロセスの解明
- (2) 理解と表出に関わる機能のかい離した事例等をふまえた理論的考察
- (3) そもそも適切な表出とは何か。その多様性を育む“遊び”を包括したダイナミズムの解明

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年2月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。さらに、デザイン学大学院の付記部分についての試問も行った。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成 年 月 日以降